

仙台大学 広報室



Monthly Report



国際スポーツ情報カンファレンス2014を開催



基調講演で熱弁を振るう高谷氏=TKPガーデンシティ仙台

国際スポーツ情報カンファレンス2014を開催	1
平成25年度 仙台大学学位記授与式・卒業式を挙行	2
第9回健康福祉研究会を開催	3
柴田町議会スポーツ議員連盟の視察団来訪	6
ウェイトリフティング米国遠征研修合宿に参加	7
学生の競技結果等	8

仙台大学スポーツ情報マスメディア学科主催「国際スポーツ情報カンファレンス2014」が、3月16日（日）仙台市青葉区のTKPガーデンシティ仙台で開催し、4月から本学スポーツ情報マスメディア学科に入学予定の8名を含む約50名の方々が来場されました。本年度は、2020年オリンピック・パラリンピック開催地が東京に決まったことから、「TOKYO2020を「ジャーナル」した先にみえる社会と未来」をテーマに報告、話し合いました。

冒頭の基調講演では東京招致で国際戦略広報を担当した、財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 事業戦略広報部 戦略広報課長の高谷正哲氏が、「TOKYO2020招致と東京からの目線、地方・大学との関わりへの期待」と題し招致活動と今後の期待を話しました。この中で高谷氏は「日本は何を訴えて招致に勝利したか」「東京開催で被災地にどう貢献したいか」「2020年を国際スポーツで働くことへのヒント」の3つについて述べ、「被災からの復興が招致には必要だった。オリンピック開催に向け学生が積極的に経験値を積むことで活躍の場が広がる」と熱いメッセージを参加者に伝えました。

この後のSession1情報戦略（Intelligence）からの視点と、Session2メディア（Media）の視点では、本学スポーツ情報マスメディア学科教員8人が、TOKYO2020やその先のスポーツを取り巻く諸問題の発展・課題整理に

学生の活躍や、取り組みをご存知でしたら
広報室までお寄せください。

Monthly Reportで紹介する他、報道機関
にも旬な話題を提供していきたいと考えて
おります。

本誌へのご意見・ご質問等がございま
したら、広報室までご一報ください。

広報室

直通 0224-55-1802

内線 佐藤美保 256

渡辺誠司 271

土生佐多 200

Email:kouhou@sendai-u.ac.jp

この中で「大学教育」の視点から報告した山内スポーツ情報マスメディア学科長は、「オリンピック日本代表選手団に占める大卒アスリートの割合が年々高くなっている今、大学はTOKYO2020に向け新しいプログラムに積極的にに関わり、技術の向上と同様に心も育て、アスリート以外にもスポーツの価値を伝えていかなければならない」と述べました。

最後のダイアログ・セッション（互いの意識を共有し、一緒に新しい方向性や知恵を確認する対話）では

TOKYO2020に向けて、スポーツの価値を含めた社会のロールモデルが変わっていくことの大切さや、大学として人をつくるシステムを考えていく必要性等が各教員から出され、盛況のうちに終了しました。

TOKYO2020に向けての取り組みが、その先のスポーツを通じた社会と未来の発展に繋がるよう、今後より多くの皆様と共に幅広い視点から考えて参りたいと存じます。

＜寄稿：スポーツ情報マスメディア研究会 溝上拓志＞



ダイアログ・セッションの様子

平成25年度 仙台大学学位記授与式・卒業式を挙



朴澤学長から賞状を授与される国分彩加さん
＝仙台大学第五体育館

3月15日（土）、本学第五体育館で「平成25年度仙台大学学位記授与式・卒業式」（第44回体育学部「卒業証書・学位記」授与式並びに第15回大学院「学位記」授与式）が挙

行されました。体育学部544名（体育学科322名・健康福祉学科107名・運動栄養学科82名・スポーツ情報マスメディア学科33名）並びに大学院スポーツ科学研究科18名合わせて562名が所定の課程を修了し、「卒業証書・学位記」を授与されました。

開式に先立ち、発生から3年となった「東日本大震災」で犠牲となった3名の学生、親族の方々、そして多くの方々のご冥福をお祈りし、会場にいる全員で黙とうを捧げました。

また、スポーツ競技や文化活動等において特に顕著な功績を挙げた方を表彰する「平成25年度学生表彰

式」も併せて行なわれ、「仙台大学学長賞」は漕艇部おぐちさくらこ

の小口桜子さん（体育学科4年一長野・岡谷東高校出）他が、「日本介護福祉士養成施設協会会長賞」はたかはしみさき

高橋美沙紀さん（健康福祉学科4年一福島西高校出）こくぶんあやかが、「全国栄養士養成施設協会理事長賞」は国分彩加さん（運動栄養学科4年一山形・新庄北高校出）が受賞し、それぞれ朴澤学長から賞状を授与されました。

たかだしゆんすけ卒業生を代表して答辞を述べた高田瞬輔さん（体育学科4年一新潟・新発田高校出）は「本当に充実した4年間でした。仙台大学で出会ったアメリカンフットボールのお陰で、心身ともに鍛えられました。4月からは晴れて警察官（新潟県警）になります。信頼される警察官を目指します」。スポーツ情報マスメディア学科総みうらたかよし

代の三浦崇悦さん（スポーツ情報マスメディア学科4年一福島東高校出）は「高校では学ぶことのできなかつた専門的な知識や理論を学ぶことができ、毎日が刺激的でした。硬式野球部では、常に人間性の向上を問われてきました。4月からは、福島県立川俣高校で常勤講師（保健体育）として勤務することになりました。生徒たちがスポーツと一生付き合っていけるような機会を作り、スポーツの楽しさを伝えていきたいです」とそれぞれ今後の抱負を力強く話しました。

卒業生のますますのご活躍とご健勝を祈念申し上げます。

第9回健康福祉研究会を開催



基調講演する大淵氏＝仙台ガーデンパレス

2月28日（金）に仙台ガーデンパレス（仙台市宮城野区）にて、「第9回健康福祉研究会」を開催しました。本研究会は、介護や福祉・健康づくり等の現場に勤める方々と本学の健康福祉学科の卒業生、在校生、教職員が相互に学習研鑽できる環境づくりを進めるために、平成16年度より毎年開催しているものです。今回は「体育系大学における健康づくりの指導者養成」をテーマに実施し、約200名が参加しました。

はじめに第1部として「高齢者の健康寿命と介護予防活動について」と題し、東京都健康長寿医療センター研究所高齢者健康増進事業支援室長の大淵修一氏より基調講演を頂きました。講演の中で、「高齢化の社会の中で、高齢者を助ける・支えるという考え方ではなく、高齢者を活かしていくということが若者の役割」という

お言葉が印象的でした。

第2部のパネルディスカッションでは、3名の卒業生（※パネリスト紹介を参照）が「健康づくりの仕事を通して学んだこと」をテーマに、現在の仕事と在学時の学びがどうつながっているかお話し頂きました。パネリストの3名は健康運動指導士の資格を取得し、健康増進やリハビリテーションを専門とする職場でご活躍されています。「授業の他にも、部活動、アルバイト、健康づくり運動サポーターの活動等さまざまな場面で自分の将来に向けての手掛かりがある。様々なことに取り組んで将来につなげてほしい」と参加した在校生に向けてメッセージを頂きました。

今回も成功裏で幕を閉じた健康福祉研究会は来年で第10回目を迎えます。今後も健康福祉をキーワードとして、より多くの方と交流できる場になることを願っています。

－ パネリスト紹介 －

- まつがさきゆい
- (1)松ヶ崎結氏（君津メディカルスポーツセンター
／平成22年運動栄養学科卒）
- おぐまりえ
- (2)小熊理恵氏（栃木健康倶楽部
／平成23年体育学科卒）
- いずみ さち
- (3)泉 幸氏（船橋市立リハビリテーション病院
／平成24年健康福祉学科卒）

<寄稿：GTセンター 新助手 齋藤まり>

本学OB菊地駿さんが柴田町職員の採用試験に合格しました



（左から）朴澤学長、菊地臨時職員、西塚室長、千葉コンサルタント
＝学長室

きくちしゅん

学生支援室の本学OB菊地駿臨時職員（平成24年体育学科卒一宮城・角田高校出）が、平成26年度柴田町職員（一般行政事務）の採用試験に見事合格しました。

3月4日（火）、西塚学生支援室長と千葉コンサルタントと共に学長室を訪れ、朴澤学長に合格を報告しました。

学長室を訪れた菊地さんに、柴田町役場の職員を目指したきっかけや今後の抱負などをお聞きしました。

Q1.柴田町役場の職員を目指したきっかけは—

もともと地元志向が強く、私の父（享年47歳）が柴田町役場に勤務していた影響を受けたこと、今まで住んできた柴田町のために貢献していきたいという思いがあることが大きな理由です。

Q2.合格までの道のりは—

5回目の受験。初級（高卒・大卒を含む）の追加募集で合格しました。勉強時間は、一日3～4時間程度。私は「追い込まれ型」なので、試験前は連日徹夜の状態が続きました。仙台大学卒業後は、大学の臨時職員としてお世話になり、朴澤学長をはじめたくさんの方々に応援して頂き、何とか合格することができました。

Q3.今後の抱負は—

父の名に恥じぬよう、頑張りたいです。スポーツ行政の分野に興味があります。色々な分野に挑戦しながら、自己の能力を高めていきたいです。

ソチ冬季五輪ボブスレー・スケルトン報告会を開催



報告会で挨拶をする小室選手（右）と黒岩選手
＝サンシャイン青葉

3月1日（土）、サンシャイン青葉（柴田町船岡中央）でボブスレーの黒岩俊喜選手（運動栄養学科2年一神奈川・橘高校出）とスケルトンの小室希選手（仙台大学職員／平成23年仙台大学大学院修了一平成20年体育学科卒一宮城・白石女子高校出）の「ソチ冬季五輪ボブスレー・スケルトン報告会」（主催：宮城県ボブスレー・リュージュ連盟）が開催されました。黒岩選手は、ソチ冬季五輪の男子ボブスレー4人乗りで26位。小室選手は女子スケルトンで19位という結果でした。

同報告会には、宮城県ボブスレー・リュージュ連盟の大沼迪義会長・仙台大学の朴澤泰治学長・宮城県議会議員の高橋伸二氏をはじめ、約30名が出席しました。

主催者を代表して、大沼会長は「宮城県連盟は長野五輪（1998年）の時に設立された。以来、本県にはソリ競技のメッカである仙台大学があることから

毎回オリンピック選手を宮城県連盟から輩出でき、大変嬉しく思っている。世界の壁は厚い。さらに精進してほしい」と挨拶。

来賓を代表して、朴澤学長は「小室選手は8年間の想いをスタート台に込め、4回滑走することができた。非常に嬉しく思っている。黒岩選手は20歳とまだ若い。4年後を楽しみにしている。両選手の滑走は全て（仙台大学で実施された）パブリックビューイングで応援した」と話されました。

小室選手は「私を支えて下さった宮城県ボブスレー・リュージュ連盟と仙台大学に感謝している。成績（19位）は正直悔しい。バンクーバーで止まった時間を動かすことができ、新しいスタートに立てたことは一つの成果」と話し、黒岩選手は「たくさんの方々々に支えて頂き、ソチでもたくさんのメッセージを頂いた。しかし、結果が伴わず、悔しい思いでいっぱい。今後は、ボブスレー界を自ら引っ張っていく覚悟」と話しました。

ソチ冬季五輪にボブスレー・リュージュ・スケルトンのチームリーダーとして帯同された鈴木省三教授（サラエボ冬季五輪ボブスレー日本代表／仙台大学ボブスレー・リュージュ・スケルトン部監督／昭和60年体育学科卒）がオリンピック報告・ビデオ映写の中で「小室選手は日本の五輪出場1枠に対し、3選手が激しい争いを繰り広げ、最終レースでライバルに勝利。一方、黒岩選手はライバルに80cm差（0.01～0.02秒差）で勝利し、それぞれ五輪出場を勝ち取った。大きなプレッシャーと並々ならぬ努力があった」ことが紹介され、改めて会場から大きな拍手が沸き起こりました。

ソチ冬季五輪では、たくさんの応援を頂き、誠に有難うございました。引き続き、黒岩・小室両選手への温かなご声援を宜しくお願い致します。

平成25年度 仙台大学学生表彰式



朴澤学長からスポーツ功労賞を授与される漕艇部の田中主将
＝KMCH大会議室

及び個人10名（ボブスレー1名・漕艇部1名・柔道部1名・体操競技部3名・女子サッカー部2名・陸上競技部2名）がスポーツ功労賞を受賞しました。

朴澤学長からは「皆さんの努力の成果が示された。加えてこの成果を得るにあたっては、協力者の支援が大いにあったことを忘れないでほしい。引き続き、仙台大学の名を高めていってほしい」と今後に向けての期待が述べられました。

同受賞式終了後、スポーツ功労賞（団体）を受賞した漕艇部の田中香加主将（＝写真）（体育学科3年一石川・小松商業高校出）は「今年のインカレ（第40回全日本大学選手権）は、女子舵手つきクォドルプルで7位という結果に終わった。来年こそ優勝を目指して頑張っていきたい。そのためには、コックスのかけ声に、4人の息を合わせ、スピードを上げて同じリズムで漕いでいくことが重要。勝負の鍵は“団結力”」と今後の抱負を力強く話しました。

3月5日（水）、本学「鹿島メモリアルクラブハウス（通称：KMCH）大会議室」で「平成25年度仙台大学学生表彰式」が行なわれ、新体操競技部・男子新体操競技部・柔道部・体操競技部・漕艇部の5団体

平成25年度 学校支援ボランティア感謝状贈呈式



3月15日（金）本学第5体育館大会議室において、平成25年度学校支援ボランティア感謝状贈呈式が開催されました。

今年度は仙台市から98名、柴田町から11名、岩沼市から30名、大崎市から3名、名取市から69名、そして新たに角田市から18名、計228名の学生に対し各教育委員会から学習支援活動や部活動支援活動に対し感謝状が授与されました。

はじめに朴澤学長が「教育現場において、実践の場を提供して頂いておりますことに心より感謝申し上げます。文部科学省は、地域における教育活動や社会貢献活動を重要視しており、大学の使命の一つとして実践経験を積み社会で活躍できる人材の育成を強く期待されているところです。今後とも、本学の教育活動に対しご指導を賜ればありがたい」と挨拶し、表彰された学生を代表し6名の学生から学習支援活動に関する経験談が報告されました。

仙台市教育委員会健康教育課清水義明課長からは「憧れであり身近な大人として、皆さんが思っている以上に児童・生徒は、大学生の皆さんの来訪を心待ちにしています。今後も夢や目標に向かって是非頑張ってください来年も子供たちの学習支援をよろしくお願ひしたい。」との講評をいただきました。最後に学生支援センター長の大山さく子教授からも感謝の言葉が述べられ、「全体としてボランティア活動者数は減少傾向にあるものの、学習支援ボランティアに関しては例年に比べ活動者数が増加しております。人とのかかわりを通じ多くのことを学んでほしいと思っております」と述べました。



まつぎよしゆき

松崎 祥之さん（体育学科1年—宮城・柴田高校出）



「ボランティア活動実践A」の授業で、母校の部活動支援の募集告知を知りボランティア登録をしました。現在、岩沼中学校でバレーボール部の部活動指導補助を行っています。10月から活動を始め約半年、週2回夕方4時頃からバレーボール部の練習指導を定期的に行っています。恩師でもある監督とのコミュニ

ケーションを大切にし、指導方針がブレないように監督の目指す方向性の意図を酌みながら指導することを大切にしています。

また、出来ることを前提とした目線からではなく、子どもたちの個々の理解度に応じたアドバイスや指導ができるよう声掛けにも工夫しながら指導にあたらせていただいているところです。3年生が良い形で中総体を迎えらるよう引き続き指導していきたいと思っています。

ふじひら しんご

藤平 真吾さん（体育学科2年—千葉・袖ヶ浦高校出）



昨年に引き続き、仙台市内のすべての小学校が参加する仙台市内陸上競技会への運営補助ボランティアを行いました。大会前には種目毎のブロックに分かれ3日間に亘る「陸上教室」が実施され、陸上競技部の部員たちと共に短距離・長距離・跳躍など種目毎の指導を行いました。

模範演技を通じ、どうやったら高く飛べたり、早く走れたりするかなどを指導すると、積極的に小学生からの質問があったり、私たち大学生もそれに解りやすいよう応えたりしました。運営にあたられた先生方から毎回感謝の言葉をいただき、やりがいも大きく感じました。選手になれなかった子どもたちが観客席から一生懸命声援を送る姿も印象的でした。私自身、高校時代から地元（千葉県富津市）の陸上競技大会の運営補助に携わった経験も活かし、大学生生活の4年間、仙台市内小学校陸上競技大会の運営に何らかの形で関わっていただけたいと思っています。



柴田町議会スポーツ議員連盟の視察団来訪



仙台大学の概要と柴田町との連携事業等の現状について
講話する朴澤学長＝管理研究棟2階大会議室

柴田町スポーツ振興議員連盟（会長 我妻弘国、当日参加者13名）は、地域に開かれた大学として地域社会に貢献している仙台大学を3月5日視察させて頂きました。

町は、仙台大学を地域の教育力の向上や活性化を図るうえで、重要な役割を果たしてきていると捉え、今後もより一層、協力・連携を深める必要性があるとしています。このことから、仙台大学の持つ教育的資源を的確に認識しておくことが不可欠であり、まちづくりの施策に活かす重要なこととの思いから再認識の意味も込め視察することとしたものです。

仙台大学は、スポーツ・レクリエーション活動の生涯学習に対し、積極的に取り組んでおり、柴田町に対しても例外ではありません。地域スポーツ活動や転倒予防・生活習慣病予防など多くの連携事業を行ってきています。視察では数多くのオリンピック選手を輩出しているボブスレー・リュージュ・スケルトン人工練習場・学生一人一人の栄養管理がされている学生食堂、あらゆる専門的なスポーツ関連施設と研究施設を丁寧な説明を受けながら見学させて頂きました。

朴澤泰治学長から、大学と地域との関わり方や、仙台大学ではスポーツの様々な研究が行われていることなどの講話も頂きました。特に朴澤学長の話で「大学は研究・教育に加え、社会貢献が一層求められている」という言葉が印象として残りました。

今回の視察を通し、これからもスポーツ活動はもちろん、介護予防・生活習慣病予防対策など、協力・連携を積極的に進めることが大切との意を強くしました。

柴田町スポーツ振興議員連盟としても、大学と町が今まで以上に連携を図れるよう環境整備に努めていくという方向づけを刻むことができました。

快く視察研修にご理解とご協力を頂きました関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

< 寄稿：柴田町議会議員

OB安部俊三（昭和47年体育学科卒） >

壹岐優さん（仙台大学大学院1年）が ウェイトリフティング米国遠征研修合宿に参加



写真：本人提供

オリンピックに3大会連続出場（アテネ・北京・ロンドン）の
米国代表・ケンドリック選手（左）と壹岐さん＝ルイジアナ
州立大学シュリーブポート校ウェイトリフティング場

2月10日（月）～3月4日（火）までの約3週間、米
国・ルイジアナ州立大学シュリーブポート校で「ウェ
イトリフティング米国遠征研修合宿」（日本ウェ
イトリフティング協会主催）が行なわれ、早稲田大学
ウェイトリフティング部監督の岡田純一准教授らと
共いさまに、本学ウェイトリフティング部の壹岐優さん
（仙台大学大学院1年―金沢学院大学卒―柴田高校
出）がコーチとして帯同しました。参加学生は、早
稲田・慶応・立教・法政・関西・金沢学院の各大学ウェ
イトリフティング部の選手7名（男子3名・女子4名）。
ルイジアナ州立大学シュリーブポート校のウェイト
リフティング部及びカナダのナショナルチームとの
合同練習が行なわれました。同研修合宿は、競技力
の向上及び語学力と国際感覚を養うことを目的とし
ています。

3月12日（水）、広報室を訪れた壹岐さんに、日米の
ウェイトリフティングの違いや今後の抱負などについて
お話を伺いました。

いろいろな経験を積んで活躍したい

Q1.コーチの仕事は―

今回で2回目の参加となりました。前は選手（金沢
学院大時代）として参加しました。今回は、自分のこと
だけでなく、選手の練習内容（選手がその日に行なった
練習メニュー）のまとめ、練習中の動画の編集、毎日提
出されるウエイトノートのやり取り、選手の所属する指
導者に選手の行動内容を毎日メールで送信するなど睡眠
時間もほとんどとれず、改めてコーチという仕事の大変
さを感じました。

Q2.日米のウェイトリフティングの違いは―

日本は練習時間に規則性（一定のルールが存在する）
があります。一方、米国は練習時間に規則性はありませ
ん。礼儀正しく、規則を持って練習を行なう日本のスタ
イルは、集団行動やコンディショニングを整えやすい点
が良いと思います。しかし、米国のスタイルのように、
トレーニングとコンディショニングの分野において自ら
考え、行動できるようになることが競技力向上に必要で
あると考えています。日米の良い点をうまく取り入れて
いくことが重要であると思います。

Q3.今後の抱負は―

今回の米国遠征研修合宿を通して、常に先を読んで行
動する大切さを学びました。求められている課題に対
し、適切な回答や助言を出すまでに時間が掛かりまし
た。今はいろいろな経験を積んでいる段階なので、多く
の経験を積みながら、良いコーチ（指導者）になれるよ
う努力していきたいです。



写真：本人提供

ウ
エ
イ
ト
リ
フ
テ
ィ
ン
グ
米
国
遠
征
研
修
合
宿
の
集
合
写
真
||
米
国
・
ル
イ
ジ
ア
ナ
州
立
大
学
シュ
リ
ー
ブ
ポ
ー
ト
校
ウ
エ
イ
ト
リ
フ
テ
ィ
ン
グ
場

初の全日本女子柔道選手権に 中村優(現代武道学科2年)と鈴木真佑(体育学科3年)が挑む



全日本女子柔道選手権に向け稽古に励む中村(右)と鈴木
=仙台大学柔道場

3月2日(日)、宮城県武道館(仙台市太白区)で「全日本女子柔道選手権大会東北予選会」が行なわれ、決勝リーグで2勝(全勝)の成績を収めた中村優(柔道2段/現代武道学科2年—静岡・藤枝順心高校出)が、見事初優勝を飾りました。また、鈴木真佑(柔道2段/体育学科3年—京都文教高校出)は、同リーグで1勝1敗の準優勝という好成績を収めました。初の「全日本女子柔道選手権大会」(女子柔道の無差別級日本一を決める本大会)への出場権を獲得した中村と鈴木。

78kg超級の中村は「決勝リーグを含め5試合中2試合で先に指導を取られた。全日本では自分から前に出て攻めていき、入賞を目指したい」と話し、鈴木は「自分は52kg級の選手。全日本は無差別日本一を決める大会。引かないで最後まで攻めの姿勢を貫き、思い切って臨みたい」と話しました。

「全日本女子柔道選手権大会」は、4月20日(日)に横浜市文化体育館で開催されます。

また、3月2日(日)、宮城県武道館(仙台市太白区)で「全日本柔道選手権大会東北予選会」(男子が出場)も行なわれ、本学男子柔道部監督の仲田直樹助教(柔道5段)が優勝。4度目となる本大会出場を決めました。

仲田助教は「東北の代表として恥じない試合がしたい。過去は2回戦進出が最高成績。一戦必勝で頑張りたい」と意気込みを話しました。

仲田助教が出場する「全日本柔道選手権大会」(男子柔道の無差別級日本一を決める大会)は、4月29日(日)に日本武道館で開催されます。

「全日本女子柔道選手権大会」への初出場を目前に、日々練習に打ち込む中村優と鈴木真佑、そして、「全日本柔道選手権大会」への4度目の出場切符を手にし、一戦一戦に心血を注ぎ上位入賞を目指す仲田直樹助教に、皆様からの熱い声援をよろしくお願い致します。

競技スキー部、南隆徳(仙台大学大学院2年)が全日本スキー選手権大会 フリースタイル競技エアリアル種目で2連覇達成



写真：美深町教育委員会提供
全日本で2連覇を達成した南の演技
=北海道美深スキー場

3月2日(日)、北海道美深スキー場で開催された「第34回全日本スキー選手権大会フリースタイル競技エアリアル種目」に出場した南隆徳(仙台大学大学院2年—北翔大学卒—北海道・美深高校出)が昨年に続き優勝、連覇を果たしました。

また、前日に開催された北海道選手権においても連覇を果たし、二年連続の二冠を達成しました。

今シーズン最大の目標としていたソチ五輪への出場は、惜しくも叶えられなかったものの「今シーズンは新たに二回転三回捻りでの大会参戦、全日本選手権後の合宿では三回転と、ジャンプの難易度が着実に上がってきている。これまでの経験を糧に4年後の目標達成に向け、計画的に活動していきたい」と自身を飛躍させるべく意欲を燃やしている南。

目標達成はもとより、マイナー競技であるエアリアルスキーの普及へ向け、一層の活躍が期待される南への温かいご声援、ご支援を宜しくお願い致します。

<寄稿：美深町教育委員会

OB前田研吾(平成21年体育学科卒)>